

方言分布の解明に向けて：原点に帰る言語地理学

著者	大西 拓一郎
雑誌名	日本語科学
巻	21
ページ	125-142
発行年	2007-04-25
URL	http://doi.org/10.15084/00002176

方言分布の解明に向けて

—— 原点に帰る言語地理学 ——

大西 拓一郎
(国立国語研究所)

キーワード

方言分布, 言語地理学, 地理情報システム, GAJ, 待遇表現

要 旨

言語地理学は、その学術的展開とともに語形分布の2次元空間的配列関係を基盤とした歴史的解釈に目的を焦点化させるに至ったが、そのような方法では、例えば待遇表現のように地域が持つ社会的特性と言語が関連を持つ事象の分析に十分対処することができない。また、配列関係に基づく解釈においても、その背景にある地理的情報を検討することは必要である。本来、言語地理学は言語外の情報と言語情報を空間的に照合することで、言語=方言と人間の実生活との関係を見ていくことに、そのダイナミズムがあった。そのような出発点に立ち戻るなら、地理情報システム(GIS)は、言語地理学を再生させるための大きなキーとなるものである。

1. はじめに

日本における方言分布に関する研究は、言語地理学の名のもと、1970年代から1980年代にかけて大きな潮流となった。そこに国立国語研究所の『日本言語地図』(LAJ)が大きな役割を果たしたことは、よく知られる。LAJのような全国規模の資料と全国各地で調査編集された多数の方言地図集の相乗効果があり、「方言学」=「言語地理学」とも受け止められるかのような活気を呈していた時代である。

『方言文法全国地図』(GAJ)が編集出版を継続してきたのは、その少し後の時代になる。残念ながら、言語地理学は低調期を迎えていた。しかし、低調だったからといって、一時代前の黄金期に方言分布がすでに分析し尽くされていたわけではない。

確かに、分布の実態に関する資料はかなり提示された。また、それらに関する一通りの考察も行われた。しかし、分布が形成された原因に関する多角的なアプローチが十分になされたわけではない。また、多くの考察が依って立った仮説的理論が十分に検証されたわけでもない。別の見方をするなら、核心に至らないままに投げ出されてきたのが方言分布に関する研究である。

本稿の目的は、そのような問題点に光を当てながら、方言の分布を解明するためには、何が必要で、どのような手段を講ずるべきなのかを考えることにある。

2. これまでの言語地理学が明らかにしたこと

従来の言語地理学があげたもっとも大きな成果は、空間と時間を関係付けたことにある（図1）。いわゆる方言圏論（柳田 1930）とそれを理論化した隣接分布・周辺分布の原則（柴田 1969）である。繰り返し言われてきたとおり、空間距離に対応する時間軸尺度の相対的性質という弱点はあるものの、それを乗り越えるための試行もあった（徳川 1972）。これら、地理的配列に立脚する方法を「配列モデル」と呼ぶなら、その後の多くの分布研究は、配列モデルに依存するもので、小林(2004)は、文献との照合を通して、それを全国レベルで徹底的に展開させたものとして評価される。

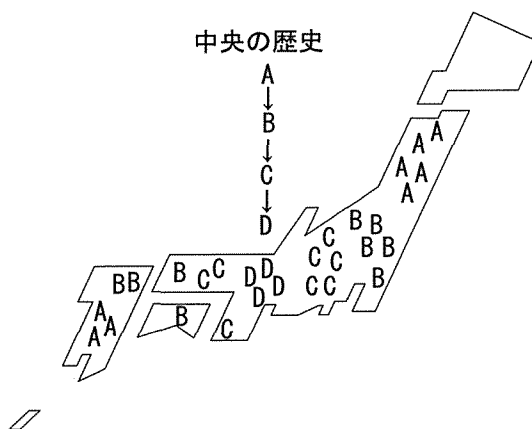


図1 配列モデル

3. 文法の分布

その小林(2004)も扱う文法事象であるが、先に記した黄金期においては、LAJが主に語彙を対象としたこと、また当初、文法事象が言語地理学になじまないことが懸念された（徳川 1979）こともあって、深く掘り下げられることは少なかった¹。

配列モデルは、各分布の位置関係を最重要視するゆえに、実は、言語外情報として地理的情報を扱うといっても、扱うのは方言分布の並び方だけなのである。「サツマイモ」や「瀬戸物」の導入や流通を想定すれば理解されるように、言語外情報は、対象により多様である。

文法事象は、「文法」というものの性格から言って、対象にまつわる言語外情報はあまりない。言語中心に考察がかなり可能であり、その点から考えるなら、文法事象は、語彙における身体語彙や「やりもらい」などと同様に配列モデルの格好の対象なのである²。

4. 言語地図だけでは分からないこと

しかし、「文法の地図」であることを看板とするGAJの対象項目すべてが配列モデルに好適であるとは限らない。とりわけ問題となるのは、第6集が扱った待遇表現である。むろん、それぞれの地図に現れた個々の語形どうしに関しては、配列モデルが適用できる余地はある。し

かし、表現が有する待遇価と使用場面との関係を考察するには、各地域が持つ社会的特性への配慮が不可欠なはずであり、そのような観点から分布をとらえようとするなら、配列モデルはたちまち立ちゆかなくなる³。

そもそも取り扱う言語外の条件を方言分布の地理空間的な位置関係だけに限定するのは無理がある。もとより言語外に存在する地理的情報は、そのような位置関係だけでなく、自然条件（標高・河川・気候等）や人文条件（人口・産業・交通等）など、多様である。配列モデルに集約されていった方言の分布研究は、このような言語外情報との照合をどこかに置き去りにしてしまった。初期の言語地理学をふりかえるなら、河川や道路を盛り込んだ白地図を慎重に作成しただけではなく、学区と方言分布の関係を扱った馬瀬(1969)のような研究もあった。このようなことを通して「人間」を呼び込む点に大きな魅力を持った言語地理学のはずが、発展とともに、扱いが煩雑で面倒な「人間」を排除していったというのは、何とも皮肉な展開である。

5. 地理情報の多角的分析

5.1. 地理情報としての方言情報

一般の言語情報は、最低限「何をどのように言う」というデータで構成される。それに対し、方言に関する情報は、「どこで、何をどのように言う」というデータを備えている。ここから理解されるように、方言情報においては、当該の言語情報が用いられる場所についての情報が必須である。場所の情報は地名でも表せるが、経度・緯度で扱うと、地名の変更などに左右されないで、後々便利である。

複数の場所の方言情報は、例えば表1のように一覧表の形で整理できる。縦の「行」方向で場所の異なり、横の「列」方向でそれぞれの場所の属性を表示する形式のデータは「地理行列」と呼ばれ、地理行列で表される情報は、「地理情報」と呼ばれる。

このように方言情報は、地理情報のひとつである。そして、前節にもふれたとおり地理情報には、行政地域や人口・交通のように人間に関する情報、海岸線や標高・降水量など自然界に関する情報など様々なものがある。

表1 地理行列

場所に関する情報			言語情報	
地名	経度	緯度	意味	語形
奈良県奈良市	135.82	34.68	捨てる	ホカス
長野県諏訪市	138.12	36.03	捨てる	ブチャル
山梨県甲府市	138.58	35.65	捨てる	ブチャル
宮城県仙台市	140.85	38.27	捨てる	ナゲル

5.2. 地理情報システム (Geographical Information Systems; GIS)

方言分布も含めて、多様な地理的情報を一手に扱うのは、困難さが予測される。最低限2次元

で扱う必要のある地理情報は、複雑であるばかりでなく、データ量も大きい。分析にあたっては、当然のことながらスクラップ&ビルドの繰り返しが要求される。これを手作業で処理するには、多大な時間と人手が必要である。

地理情報システム(Geographical Information Systems; GIS)は様々な地理情報をコンピュータ上で統括的に処理していく技術と方法であり、20世紀後半に急速に実用化が進められた。GISでは、地理情報のひとつとして、方言データも取り扱うことが可能である。方言の分布研究でもGISを活用することで、諸種の言語外情報と方言情報(言語情報)の関係を多角的に分析することが期待できる。

GISのもっとも基本的かつ重要な分析手法は、地図を介して各種の地理情報を照合するオーバーレイと呼ばれる方法である(図2)。GISを通して、言語内(方言分布)・言語外の地理情報をオーバーレイすることで、方言の分布だけを見ていたのでは分からなかったことを明らかにすることができる。以下では、まず、前節でふれた待遇表現のデータを利用しながら、言語外情報に基づく地域特性と方言分布の関係を見ていくことにする。

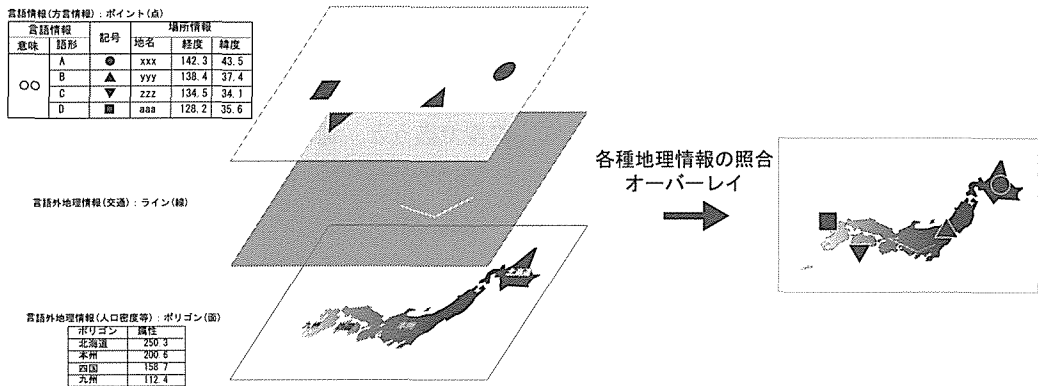
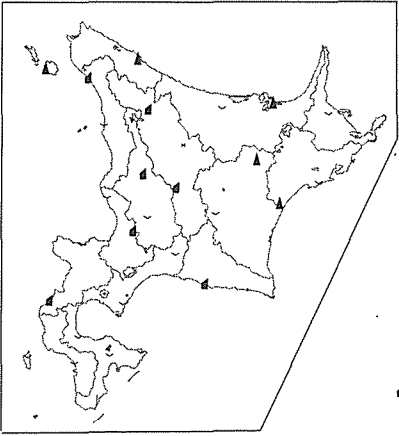


図2 GISとオーバーレイ

6. 待遇表現と地域特性(1)—共通語形の分布—

GAJ第6集が対象とする待遇表現では場面を特定して扱っており、271図「書きます(か)」では、「土地の目上の人に対して非常に丁寧に」という場面(GAJでは「B場面」と呼ぶ)が設定され、非常に高い対者待遇場面における敬語形式の全国的な分布が、図3のように見られる⁴。この図の中で、共通語形と考えられるオ書キニナルや書カレルの類に注目するなら、首都圏や関西圏に多いように見える。つまり、人口密度の高い都会に共通語形が現れやすいと、推測されるわけである。

- 敬語動詞
- イ イラッシャル類
- II イラッシャル類+丁寧
- III オコシ類
- IV オコシ類+丁寧
- Y オイデナサル・オイデンサル・オイデニナル類
- YY オイデナサル・オイデンサル・オイデニナル類+丁寧
- YI オイデ・オイデル類
- YII オイデ・オイデル類+丁寧
- YIY オジャル・オデル類
- YIYY オジャル・オデル類+丁寧
- YIYI オサイジャル類, オサイジャル類+丁寧
- YIYYI ゴザル類
- YIYYII ゴザル類+丁寧
- YIYYIIY ミエル類, ミエル類+丁寧
- YIYYIIYY ワス類
- YIYYIIYYI メンセーン類
- YIYYIIYYII メーン類
- YIYYIIYYIY エーン類
- YIYYIIYYIYY ミヤ・ミュ類
- YIYYIIYYIYYI モールン類
- YIYYIIYYIYYII オールン・ワールン類
- 敬語動詞(線種)
- MI マイル類, マイル類+丁寧
- MIY メイアゲ類
- 一般動詞
- AI ○レル・ラレル類
- AIY ○レル・ラレル類+丁寧
- AIYI ○ナサル類
- AIYII ○ナサル類+丁寧
- AIYIY ○サル・ハル・シャル類
- AIYIYY ○サル・ハル・シャル類+丁寧
- AIYIYYI ○オ～ニナル類
- AIYIYYII ○オ～ニナル類+丁寧
- AIYIYYIY ○ナル類
- AIYIYYIYY ○ナル類+丁寧
- AIYIYYIYYI ○テヤ類
- AIYIYYIYYII テヤ類+丁寧
- AIYIYYIYYIY ○ヤル・アル類
- AIYIYYIYYIYY ○ヤル・アル類+丁寧
- AIYIYYIYYIYYI ○ヤンス・ヤス類
- AIYIYYIYYIYYII ○オ～ル類
- AIYIYYIYYIYYIY ○～ル類+丁寧
- AIYIYYIYYIYYIYYI ○ゴザル類
- AIYIYYIYYIYYIYYII ゴザル類+丁寧
- AIYIYYIYYIYYIYYIYYI ○イタシャル類
- AIYIYYIYYIYYIYYIYYII ○ミセーン類
- AIYIYYIYYIYYIYYIYYIY ○エーン類
- AIYIYYIYYIYYIYYIYYII ○マイ類
- AIYIYYIYYIYYIYYIYYIYYI ○ミヤ・ミュ類
- AIYIYYIYYIYYIYYIYYIYYII ○モールン類
- AIYIYYIYYIYYIYYIYYIYYIY ○ールン・ワールン類
- 非尊敬・丁寧
- AIYIYYIYYIYYIYYIYYIYYIIY ○マス・デス・デゴザイマス等
- AIYIYYIYYIYYIYYIYYIYYIYYI ○イタス類
- AIYIYYIYYIYYIYYIYYIYYIYYII ○ヤピン類
- AIYIYYIYYIYYIYYIYYIYYIYYIYYI ○非尊敬・非丁寧
- その他
- 無回答



「書きます(か)」
B場面—土地の目上の人に非常に丁寧に—
第6集271図より

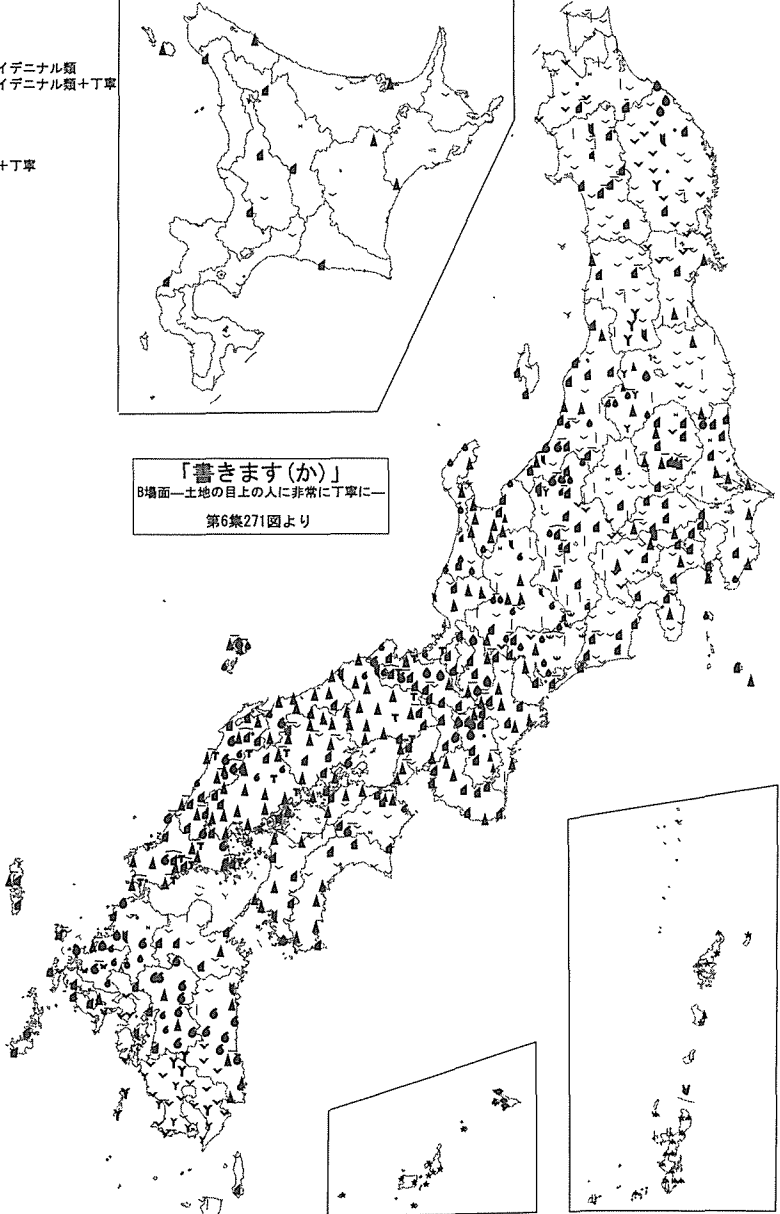


図3 「書きます(か)」—土地の目上の人に非常に丁寧に—

図4では、GISを用いてオ書キニナル・書カレルの分布と人口密度の関係を示した⁵。オ書キニナルに注目すると、首都圏から関西圏にかけて人口密度が高い地域に現れやすいことが明瞭であり、全国共通語らしい分布を見せている。一方、書カレルはその傾向が散漫で、特に西日本では、都市部であるかどうかに関わらず分布が見られ、西日本共通語的である。同じように共通語形と考えられながら、オ書キニナルと書カレルは性格に異なりのあることが、GISを通すことで分析的にとらえられた。

言葉は、人と人が意思疎通するための重要な道具であるが、そのような言葉が通じるためには、共通の約束事があると考えられる。どのような言語形式を選択するかも、その一つであり、「土地の目上の人に向かって非常に丁寧に」という設定は、共通語的な形式が現れやすい場面と考えられる。

しかし、そのようにして現れる共通語も全国一律ではない。ここに扱った「書きます(か)」で言えば、オ書キニナルと書カレルの2種類の共通語形が全国的に多く見られるのは確かであるが、オ書キニナルは大都市圏で現れやすいのに対し、書カレルは地域の都市性に関係なく、西日本に広く分布している。つまり、共通語の運用にも地域差・社会差があることが分かる。

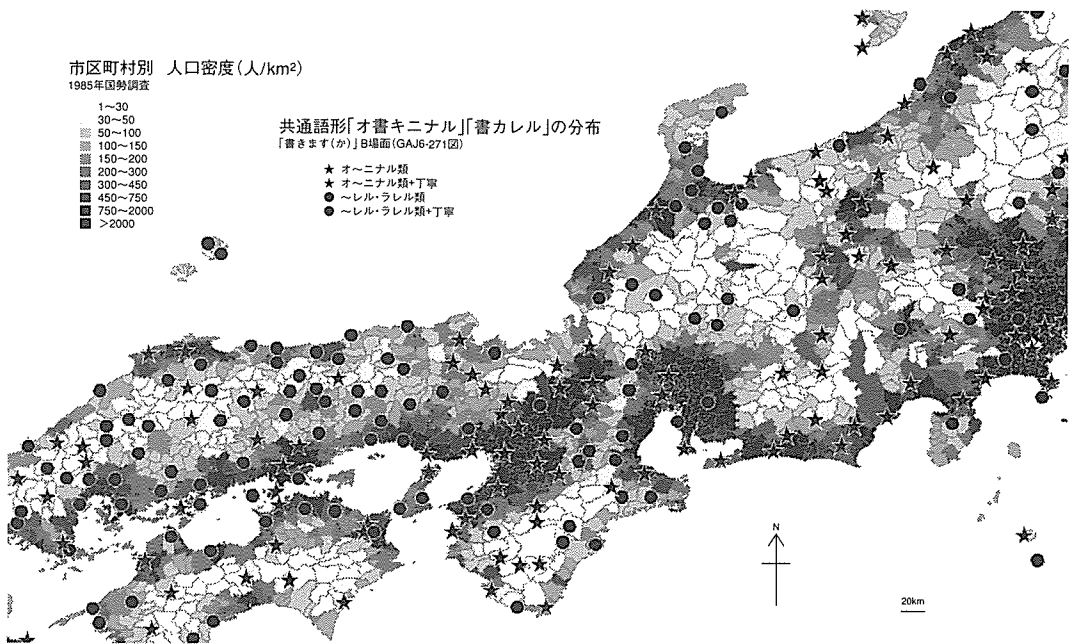


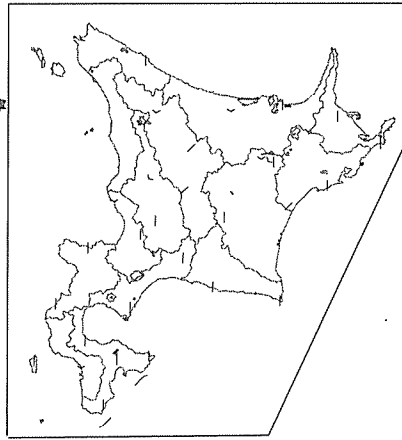
図4 オ書キニナル・書カレルと人口密度

7. 待遇表現と地域特性(2)―父親への敬語―

GAJ 第6集の285図・286図「います(か)」は、自分の父親に対する表現を扱っている。現在の共通語では、父親に対して尊敬語（イラッシャル・オラレルなど）だけでなく丁寧語（～マス・デスなど）を用いることも少ないと思われる。全国的なようすを図5に示した⁶。尊敬語の使用地域には明瞭なかたよりが見られる。西日本に広いとともに東日本でも会津地方（福島西部）にまとまる。そして、この分布は、図6「近所の知り合いの人に対するやや丁寧な言い方」の分布（GAJ283図・284図「います(か)」）に類似している点に注意したい。

身内である父親への待遇表現の分布を表す図5が示す分布の背景には、各地地域社会の特性が存在していないだろうか。とりわけ、ここで考察しようとする親族としての父親に対する尊敬語使用には、家族のありかたの違いが関連することが予想される。実際、そのような家族構成のありかたには、民族差や地域差が存在し、それが客観的な数値に基づく分布に現れることが指摘されてきた（西村 1954）。

- 敬語動詞
- イラッシャル類
 - イラッシャル類+丁寧
 - オコシ類
 - オコシ類+丁寧
 - ▲ オイデナサル・オイデンサル・オイデニナル類
 - ▲ オイデナサル・オイデンサル・オイデニナル類+丁寧
 - オイデ・オイデル類
 - ▲ オイデ・オイデル類+丁寧
 - ▲ オジャル・オデル類
 - ▲ オジャル・オデル類+丁寧
 - ▲ オサイジャル類, オサイジャル類+丁寧
 - ▲ ゴザル類
 - ▲ ゴザル類+丁寧
 - ▲ ミエル類, ミエル類+丁寧
 - ▲ ウス類
 - ▲ メンセーン類
 - ▲ メーン類
 - ▲ エーン類
 - ▲ ミヤ・ミュ類
 - ▲ モールン類
 - ▲ オーレン・ワールン類
 - 敬語動詞(雑類)
 - ▲ マイル類, マイル類+丁寧
 - ▲ メイアゲ類
- 一般動詞
- (他 他) レル・ラレル類
 - (他) レル・ラレル類+丁寧
 - (他 他) ナサル類
 - (他) ナサル類+丁寧
 - (他 他) サル・ハル・シャル類
 - (他) サル・ハル・シャル類+丁寧
 - ▲ オ〜ニナル類
 - ▲ オ〜ニナル類+丁寧
 - (他 他) ナル類
 - (他) ナル類+丁寧
 - ▲ テヤ類
 - (他) テヤ類+丁寧
 - (他 他) ヤル・アル類
 - ▲ ヤル・アル類+丁寧
 - (他 他) ヤンス・ヤス類
 - ▲ オ〜ル類
 - ▲ オ〜ル類+丁寧
 - ▲ ゴザル類
 - ▲ ゴザル類+丁寧
 - ▲ イタシヤル類
 - ▲ ミセーン類
 - ▲ エーン類
 - (他) マイ類
 - ▲ ミヤ・ミュ類
 - ▲ モールン類
 - ▲ オーレン・ワールン類
 - ▲ 非尊敬・丁寧
 - (他 他) マス・デス・デゴザイマス等
 - ▲ イタス類
 - (他) ヤビン類
 - (他 他 他) 非尊敬・非丁寧
 - その他
 - 無回答



「いますか」
—自分の父親に—
第6集285, 286図より

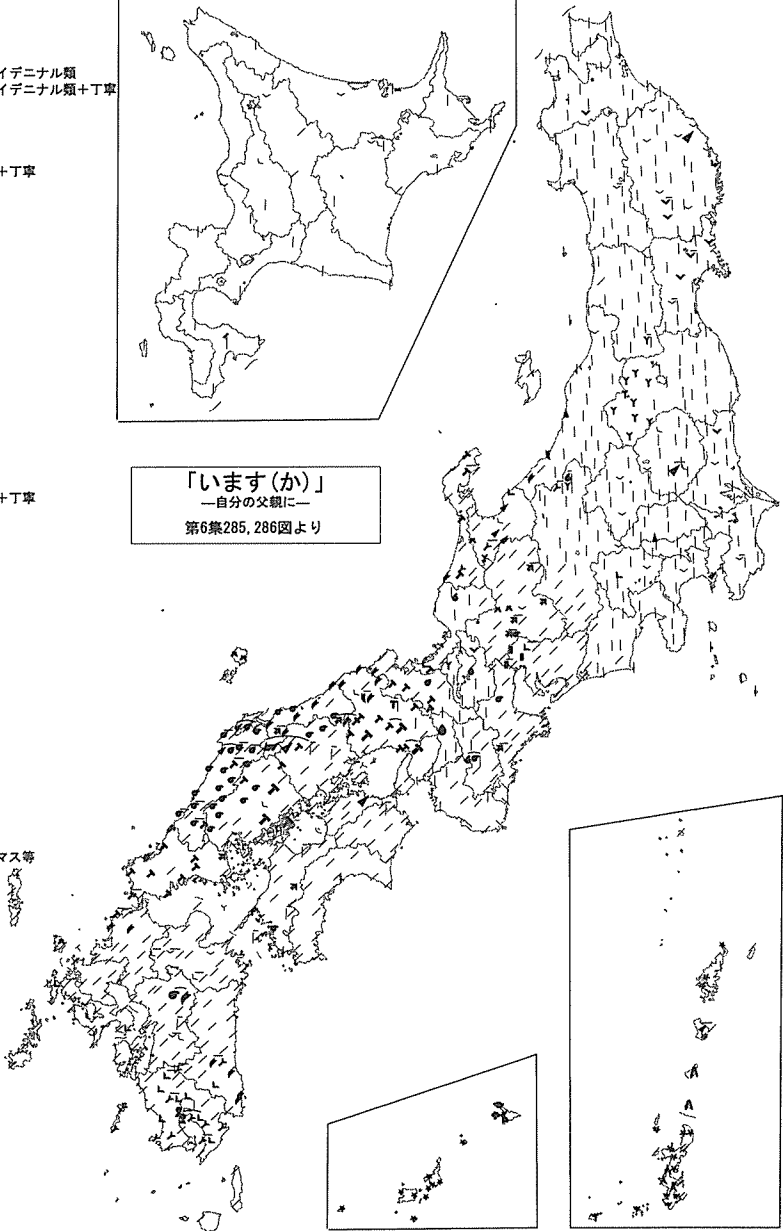


図5 「いますか」—自分の父親に—

- 敬語動詞
- ○イラッシャル類
- ○イラッシャル類+丁寧
- オコシ類
- オコシ類+丁寧
- ▼ ○オイデナサル・オイデンサル・オイデニナル類
- ▼ ○オイデナサル・オイデンサル・オイデニナル類+丁寧
- ▼ ○オイデ・オイデル類
- ▼ ○オイデ・オイデル類+丁寧
- ▼ ○オジャル・オデル類
- ▼ ○オジャル・オデル類+丁寧
- ▼ ○オサイジャル類, オサイジャル類+丁寧
- ▼ ○ゴザル類
- ▼ ○ゴザル類+丁寧
- ▼ ○ミエル類, ミエル類+丁寧
- ▼ ワス類
- ▼ ○メンセーン類
- ▼ ○メン類
- ▼ ○エーン類
- ▼ ○ミヤ・ミュ類
- ▼ ○モールン類
- ▼ ○オールン・ワールン類
- 敬語動詞(謙讓)
- マイル類, マイル類+丁寧
- メイアゲ類
- 一般動詞
- (格 格) レル・ラレル類
- (格 格) レル・ラレル類+丁寧
- (格 格) ナサル類
- (格 格) ナサル類+丁寧
- (格 格) サル・ハル・シャル類
- (格 格) サル・ハル・シャル類+丁寧
- オ〜ニナル類
- オ〜ニナル類+丁寧
- (格 格) ナル類
- (格 格) ナル類+丁寧
- (格 格) テヤ類
- (格 格) テヤ類+丁寧
- (格 格) ヤル・アル類
- (格 格) ヤル・アル類+丁寧
- (格 格) ヤンス・ヤス類
- オ〜ル類
- オ〜ル類+丁寧
- ゴザル類
- ゴザル類+丁寧
- イタシヤル類
- ミセーン類
- (格 格) エーン類
- (格 格) マイ類
- ミヤ・ミュ類
- モールン類
- オールン・ワールン類
- 非尊敬・丁寧
- (格 格) マス・デス・デゴザイマス等
- イタス類
- (格 格) ヤピン類
- ／、○(格 格 7) 非尊敬・非丁寧
- その他
- 無回答

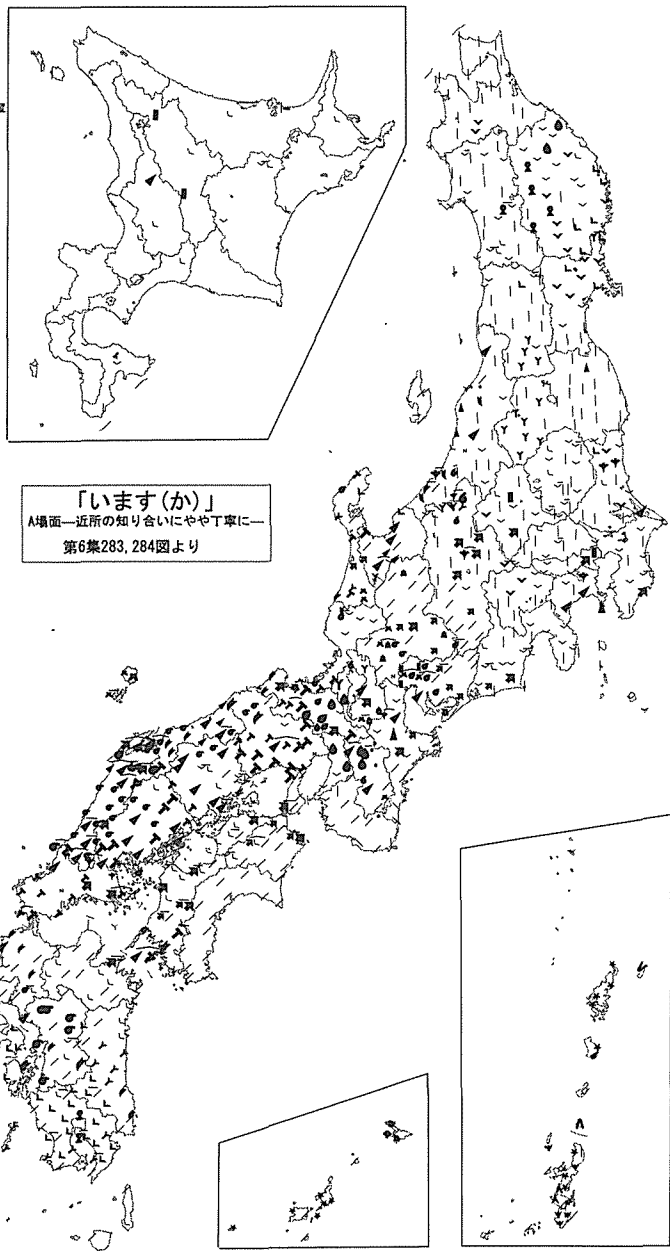


図6 「いますか」—近所の知り合いの人にやや丁寧に—

図7には、核家族の割合との関係を九州を中心に示した。この図では、南九州に注目したい。核家族の割合の高い地域と父親への尊敬語が使われている地域がよく一致している。

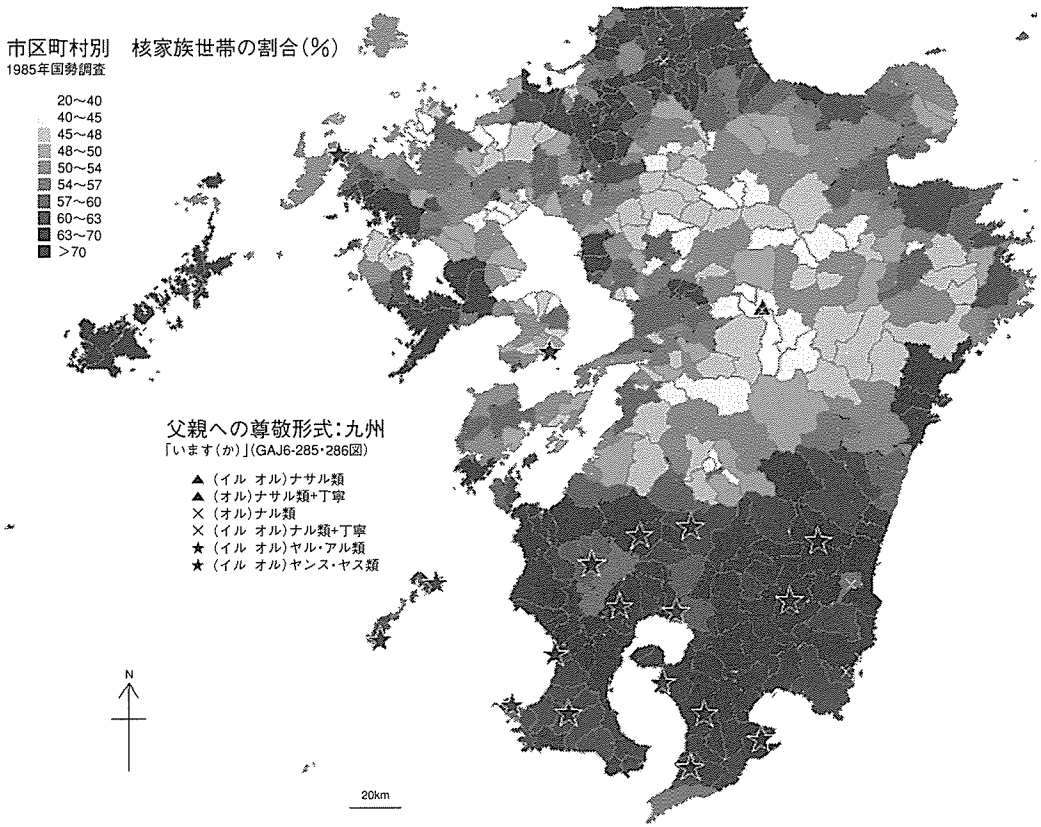


図7 父親への尊敬語と核家族世帯の割合—九州—

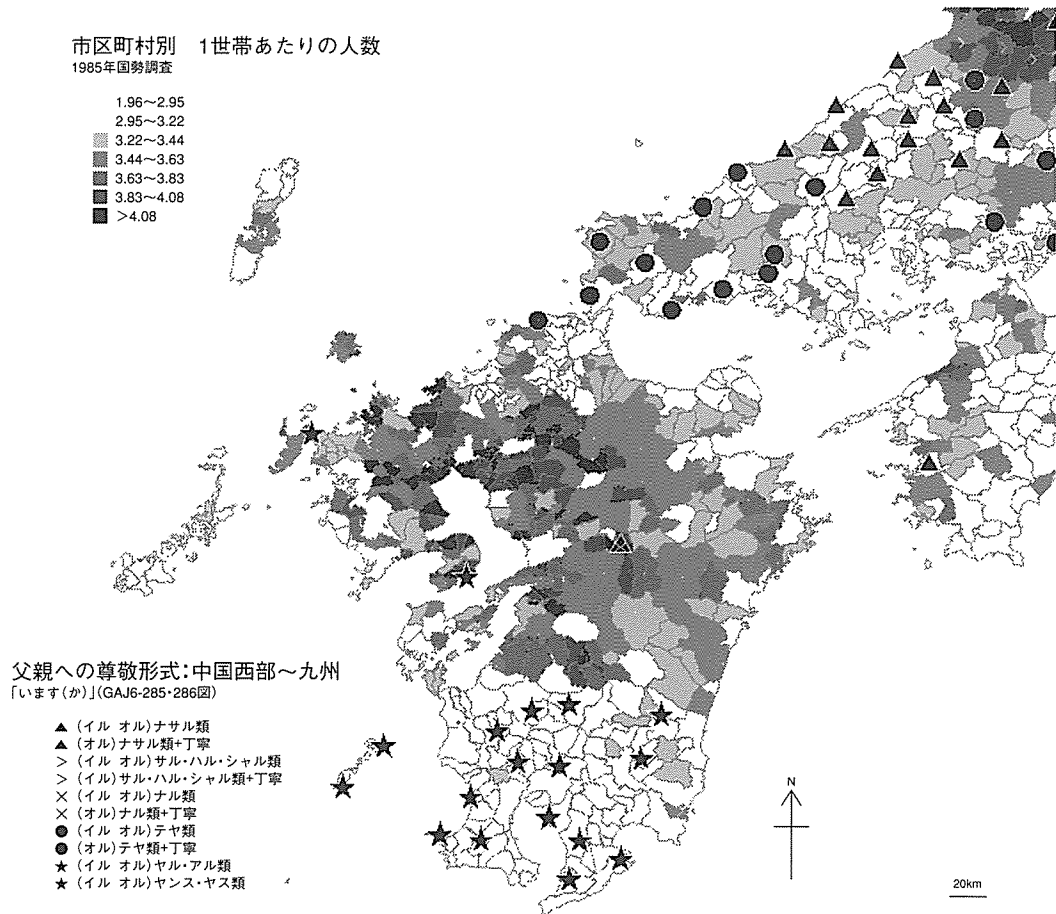


図8 父親への尊敬語と1世帯あたりの人数(世帯人数) —中国西部から九州—

図8には、中国西部から九州にかけての地域を対象に1世帯あたりの人数(世帯人数)と父親への尊敬語の関係を示した。中国西部や南九州で、世帯人数が少ない地域と父親への尊敬語使用地域がよく一致することが分かる。

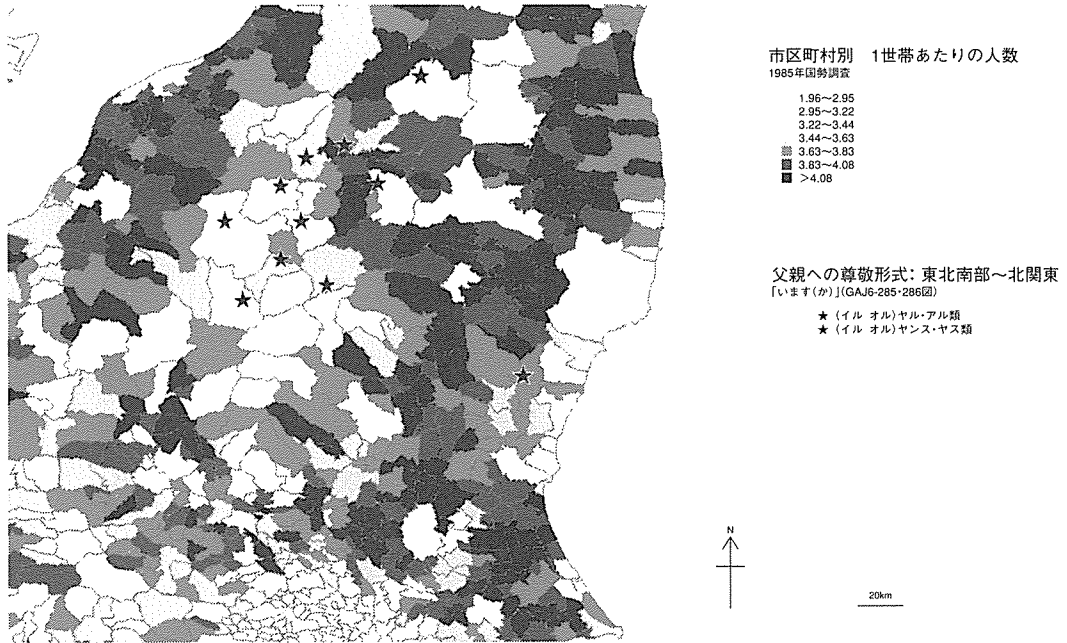


図9 父親への尊敬語と1世帯あたりの人数(世帯人数) —東北南部から関東—

図9では、東北南部から北関東を対象に世帯人数と父親への尊敬語の関係を示している。東北地方は全体に世帯人数が多いが、そのような東北にありながら、父親への尊敬語を用いる会津地方は世帯人数が少ない。つまり、会津地方は、世帯人数の多い大家族制地域に周囲を取り囲まれて、特異な地域特性を有しており、そのような地域で、父親への尊敬語が用いられていることが分かる。

言語外の情報と照合することで、父親への尊敬語は、核家族的に世帯あたりの世代が少なく、また世帯あたりの人数が少ない地域で用いられる傾向のあることが読み取れた。以上から考えられるのは、父親への尊敬語の使用は、小家族制社会という地域特性に関係がありそうだということである。従来から、身内尊敬語の使用が西日本に偏ると見られてきたが、それはこのような特性を持った地域が西日本に多いことが関係するものではないだろうか。しかし、会津の例からも分かるように、「東西」のような枠でとらえるのは適切ではなく、生活集団としての家族のありかたをもとに考察すべきと考えられる⁷。

このように父親への尊敬語の使用と家族制度が関わる理由を簡潔に記すなら、次のようになるだろう。小家族制の地域社会では、世代間の独立性が高い⁸。ゆえに、尊敬語の使用を決めるひとつの重要なファクターであるウチ・ソトに関して、小家族制地域では、血縁内であっても、世代の異なりはゆるやかなソトの関係を生み出す。その結果、尊敬語使用の別のファクターである年齢の上下関係が顕在化し、父親が尊敬語の対象とされる。

先に、「自分の父親」に対する表現の分布(図5)と「近所の知り合いの人」に対する表現の分布(図6)の類似にふれた。これは、父親への尊敬語を使用する地域では、自分の父親の位置

付けが、近所の知り合いに類似していることを意味するものではないだろうか。この場合、「自分」は、「父親」の子どもではあるものの、調査時点では社会的に独立した大人（成人）であることに注意したい。

一方、大家族制地域では、世代が異なってもウチに止まるとともに、幼少年年齢期はともかくも成人においては、家族内での年齢関係はあまり機能せず、父親は原則として尊敬語の対象とはならない。

以上のことは、民俗学で考えられてきた年齢階梯制社会（西日本）と同族集団社会（東日本）というとらえかた（宮本 1984:53）と矛盾しない。このように、待遇表現をとらえるには、詳細な方言情報とともに、それぞれの地域が持つ社会構造なども合わせて検討することが求められることになる。

前節では、特定の場面における語形の選択について見たが、敬語の運用においては、人間どうしの社会的関係のとらえ方も約束事の一つとして機能するのは当然である。「自分の父親に向かって」という場面は、親族内の関係であるが、「います(か)」で見ると尊敬語の現れ方に明瞭な地域差が存在しており、その背景には家族構成の地域差があると考えられる。「家族」は最小の生活集団であるが、そのありかた自体が地域社会の文化的特性の一つとして、とらえられるものである。言葉の運用面にもそのような異なりが反映されているわけで、方言の研究では、言葉だけを見ては核心がつかめないことが分かる⁹。

8. 配列モデルと地理情報

従来型の配列モデルに依拠した考察においても、言語外の地理情報との照合は、興味深い事実を示す。

九州では、古典語の二段活用動詞「起きる」が、終止形において「起クル」のような二段活用の形で現れたり、否定形において「起キラン」のようなラ行五段化と呼ばれる形で現れたりする。終止形の「起クル」は、古い形式の残存であり、九州の東海岸に勢力が強い。一方、否定形の「起キラン」は、終止形が活用変化の一般的な方向として、一段化により「起キル」に変化し、それをベースに類推がはたらいてラ行五段化したものと考えられる。この原理からするなら、二段活用形式とラ行五段化形式が併存することは、言語内の要因に基づく変化として説明する限りにおいては、考えにくい。

しかし、実際にはこのような併存活用体系を有する地域が存在する。GAJ 第2集の61図「起きる」(終止形)と72図「起きない」(否定形)の分布を総合的に地図化すると、東側の〈終止形：二段型、否定形：非ラ行五段型〉タイプと、西側の〈終止形：一段型、否定形：ラ行五段型〉タイプの双方が、対立しながら、中間地帯では接触が生じて、〈終止形：二段型、否定形：ラ行五段型〉という新たな活用体系が発生していることが分かる(図10)。ここでは、異なる体系のぶつかりあいという言語外的条件による変化、すなわち新しい活用体系の発生が起きていると見られる。

- | | |
|----------------|------------------|
| 終止形 | 否定形 |
| ● 二段型(起クル・起クツ) | 非ラ行五段化(起キンなど) |
| ○ 一段型(起キル) | ラ行五段化(起キラン・起キヤン) |
| ◎ 二段型(起クル・起クツ) | ラ行五段化(起キラン・起キヤン) |

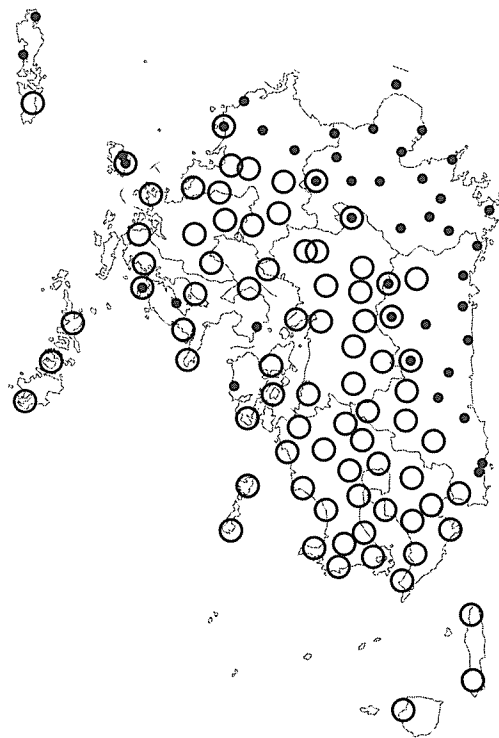


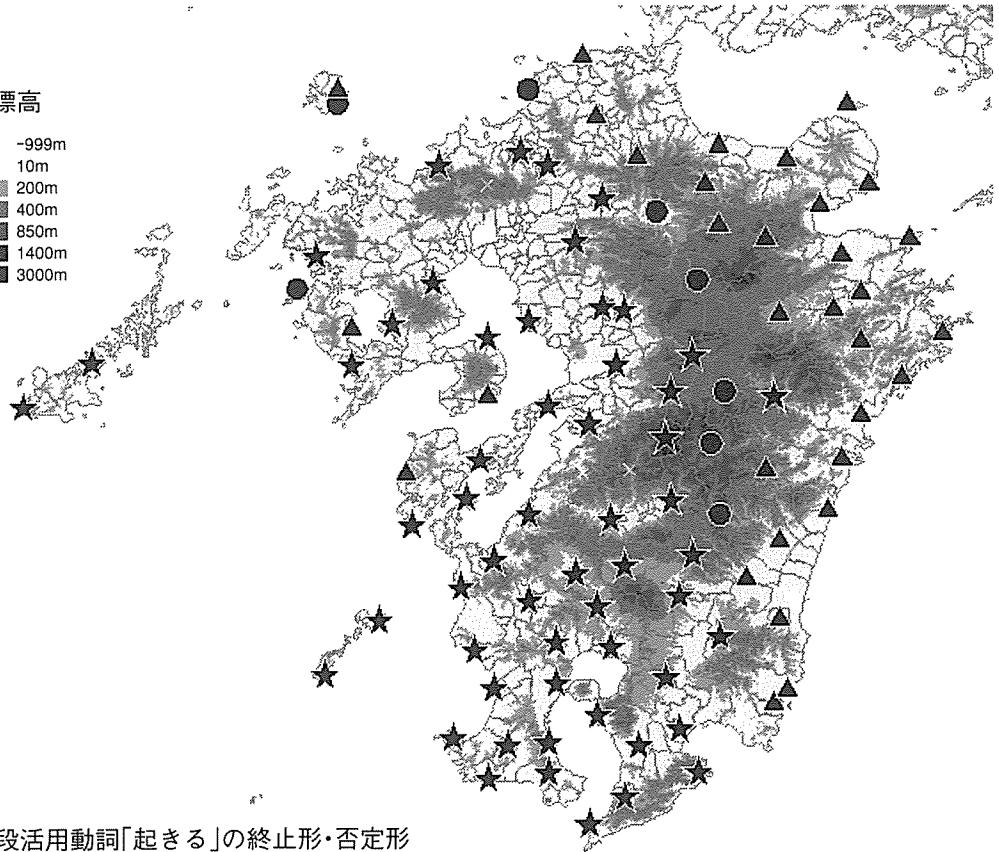
図10 九州における古典語二段活用動詞「起きる」の終止形・否定形

ところで、当然のことながら、従来の言語地理学において、接触は非常に重要な言語変化の要因と考えられてきたわけであるが、どのような場所で接触が起きているかは、ほとんどの場合、あくまでも方言分布の並び方でしか、とらえることができなかった。

GISを用いると、接触による新体系が発生しているのはどのような場所なのか、標高や人口密度を重ね合わせて考察することができる(図11, 図12)。これらから分かるのは、新体系が存在しているのは、標高の高いところであり、人口密度の低い地域である。つまり、便が良くない非都市的な地域において、周囲の都市的地域から押し寄せた優勢な形式がぶつかりあい、それらを受け入れることで、新たな活用体系が生じているわけである。

標高

- 999m
- 10m
- 200m
- 400m
- 850m
- 1400m
- 3000m



上二段活用動詞「起きる」の終止形・否定形
 「起きる」「起きない」(GAJ2-61・72図)

- ★ 終止：一段型、否定：ラ行五段型
- × 終止：一段型、否定：非ラ行五段型
- 終止：二段型、否定：ラ行五段型
- ▲ 終止：二段型、否定：非ラ行五段型

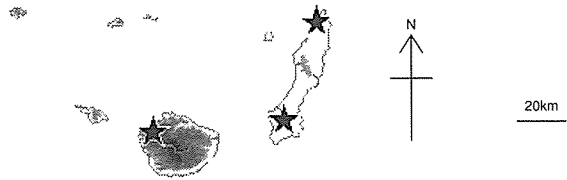


図11 九州における古典語二段活用動詞「起きる」の終止形・否定形と標高

市区町村別 人口密度(人/km²)
1985年国勢調査

- 1.9~28.04
- 28.04~54.98
- 54.98~90.5
- 90.5~135.2
- 135.2~203.4
- 203.4~290.42
- 290.42~443.94
- 443.94~745.16
- 745.16~1849.26
- >1849.26

上二段活用動詞「起きる」の終止形・否定形
「起きる」「起きない」(GAJ2-61・72図)

- ★ 終止：一段型、否定：ラ行五段型
- × 終止：一段型、否定：非ラ行五段型
- 終止：二段型、否定：ラ行五段型
- ▲ 終止：二段型、否定：非ラ行五段型

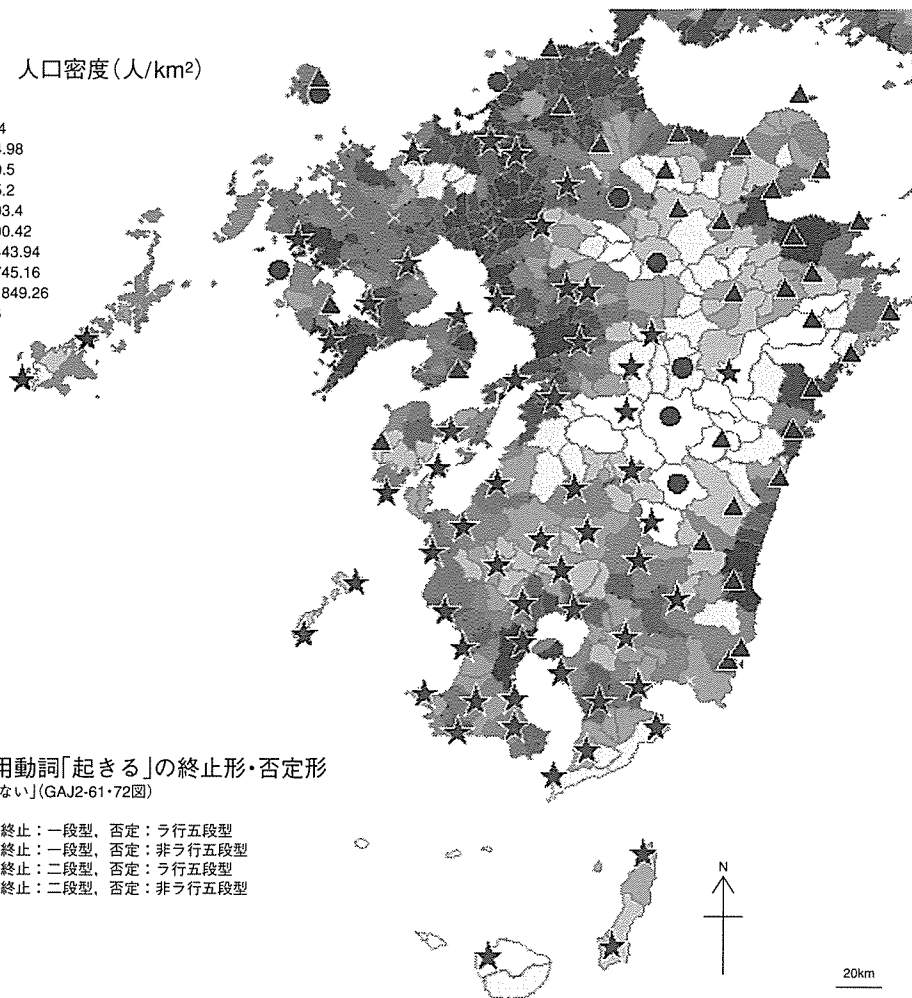


図12 九州における古典語二段活用動詞「起きる」の終止形・否定形と人口密度

9. 配列モデルの再検討

言語外情報との照合を通して方言情報を検討することで、言語のみの分布ならびに配列モデルのみに依存していたのでは分からないことが見えてくることを明らかにすることができた。

もっとも、これは配列モデルそのものを否定していない。一方で、配列モデルは、あくまでも仮説であることに留意したい。文化的中心地から周辺に拡散するというのは、まだ証明されていない仮説である。むしろ、モデルというものには、適切に現実を説明できることをもってその有効性が評価されるという側面があることは事実である。同時に、現実の観測を通して、実証されるという性格も有していることを忘れてはならない。後者の観点から配列モデルを実証するためには、経年的に分布を観察し続けるほかない。確かにこれはかなりの事業である。しかし、観察を通して、はじめてモデルは証明される。また、もし証明されなかったとしても、けっして無

益に終わることはなく、必ずや別の理論が帰納的に構築されるはずである。

10. むすび

方言分布の解明に向けて、何が求められるかを述べてきた。GISを通して諸種の地理情報をおおいに活用すべき時期を方言学は迎えている。そこでは古典的理論ともいべき配列モデルのみに依存しない、対象とする方言分布同様に、多様なアプローチがあるべきだ。同時に、いずれの取り組みにせよ、静的なデータに基づく考察は、解釈である。それらは、経年的観察を通して実証されるものであることを忘れてはならない。

言語地理学は、その原点に立ち帰るなら、言葉の地理空間的ありかたを基盤に、「言葉」ならびに言葉に映し出される「人間」を客観的に追究する学問分野であったはずだ。世の中がどんなに変わろうと、人間は、実体を持った知的生物である限り、社会的地理空間から乖離することはない。したがって、地理的側面に基づく言葉の分析は永続的な研究テーマである。このように言語地理学の本来の目標に立ち戻るなら、GISは極めて大きな力を発揮する研究ツールであることが理解されるだろう。

注

- 1 もっとも柴田(1954)は早くから文法を対象から外す必然性があまりないことを指摘している。
- 2 GAJをベースにした小林(2004)、日高(2005)、三井(2003)などが代表的な研究である。
- 3 配列モデルの適否は、分布のありかたにも依存する。古くからよく知られる東西対立のようなタイプには、配列モデルはうまく適用できない。
- 4 扱う待遇表現の項目どうしの記号を統一するために、凡例には、地図上に現れない語形も挙がっている。凡例で○が付いている語形が地図上に存在する語形である。
- 5 人口密度・核家族の割合・1世帯当たりの人数といった人口関係の言語外地理情報は、いずれもGAJ調査終了時に近い1985年の国勢調査のデータに基づく。
- 6 凡例における○が付いた語形は注4同様に地図上にその語形が存在することを示している。また、一般動詞において(イル オル)のように示しているのは、左側の記号で()の中に挙げた動詞に対応する語形が地図上に存在することを意味する。図6も同様である。
- 7 図8と図9の世帯人数の「しきい値」(レンジ値)に与えた濃淡が異なることから理解されるように、家族規模の大小は、周辺地域との相対的な関係の中で検討されるべきものであり、絶対的な数値では決められないと考えられる。
- 8 ここで考察対象とする小家族制地域は、非大都市部である。大都市も核家族が多く、世帯人数が少ないという点で、数値上、非大都市部の小家族制と区別がなされないが、相互の家族制度には、かなり異なりがあると考えられる。これらの区分は、課題である。
- 9 地域の特性と言語の関係を分布からとらえる研究は、澤村(2007)、鳥谷(2001, 2004)のように近年増えつつある。

文 献

- 国立国語研究所(1966-1974)『日本言語地図』1-6, 大蔵省印刷局
国立国語研究所(1989-2006)『方言文法全国地図』1-6, 国立印刷局
小林隆(2004)『方言学的日本語史の方法』ひつじ書房
澤村美幸(2007)「方言伝播における社会的背景—「シャテー(舎弟)」を例として—」『日本語の研究』3(1)
柴田武(1954)「方言調査法」東条操編『日本方言学』, 367-433, 吉川弘文館
柴田武(1969)『言語地理学の方法』筑摩書房
徳川宗賢(1972)「ことばの地理的伝播速度など」服部四郎先生定年退官記念論文集編集委員会編『現代言語学』, 667-687, 三省堂(徳川 1993に再録)
徳川宗賢(1979)「これからの言語地理学」『国語学』119(徳川 1993に再録)
徳川宗賢(1993)『方言地理学の展開』ひつじ書房
鳥谷善史(2001)「語彙分布から見た大阪府の地域性—『大阪府言語地図』における風名語彙の分布から—」『地域言語』13
鳥谷善史(2004)「データベース資料からみた日本海側のことば」真田信治監修『日本海沿岸の地域特性とことば』, 279-302, 桂書房
西村嘉助(1954)「家族人口の分布」『広島大学文学部紀要』6
日高水穂(2005)「方言における文法化—東北方言の文法化の地域差をめぐって—」『日本語の研究』1(3)
馬瀬良雄(1969)「学区と方言」『国語学』77(馬瀬 1992に再録)
馬瀬良雄(1992)『言語地理学研究』桜楓社
三井はるみ(2003)「極限のとりたての地理的変異」沼田善子・野田尚史編『日本語のとりたて—現代語と歴史的変遷・地理的変異—』, 123-142, くろしお出版
宮本常一(1984)『忘れられた日本人』岩波文庫
柳田国男(1930)『蝸牛考』刀江書院

付 記

本稿は、2006年12月16日に、国立国語研究所にて開催された公開研究発表会「方言文法の全国分布と全国方言調査の将来像」の予稿集に掲載したものを改稿したものである。

GAJのデータは、国立国語研究所による次のサイト(「方言研究の部屋」)で公開している。本稿もこのデータを利用した。

<http://www.kokken.go.jp/hogen>

GAJなど方言データをGISで利用する方法等に関しては、筆者による次のサイト(「方言の宇宙」)も参照のこと。

http://www2.kokken.go.jp/~takoni/index_j.htm

大西 拓一郎(おおにし たくいちろう)

国立国語研究所 研究開発部門

190-8561 東京都立川市緑町10-2

takoni@kokken.go.jp